駿河ほねほね団報告
体験型展示イベント「標本さわり」

坂本友実

写真左：3Dプリンターで作ったシカの手根骨パズルに挑戦
写真右：触れる標本。オオカミが人気でした。

2025年8月23日（土）・24日（日）の2日間、ふじのくに地球環境史ミュージアム2階講堂にて開催されました、体験型展示イベント「標本さわり」に駿河ほねほね団も参加しました。本イベントは、骨格標本や毛皮標本に実際に触れる体験を通して、動物の体の仕組みや多様性を学んでいただくことを目的としております。普段はガラス越しに眺めることの多い標本に直接触れることができる機会として、多くのご家族や動物好きの方々に来場いただきました。23日（土）に108名、24日（日）は225名、来場者数は2日間で合計333名でした。

会場では、オオカミやアライグマ、ハクビシン、タヌキなどの毛皮標本、ツキノワグマの前脚と後脚（フリーズドライ加工）など自由に触れられる標本を用意。毛並みの違いや質感、手足の形状などを体感できる展示は大変好評で、子どもから大人まで熱心に観察する姿が見られました。中には、ハリネズミの剥製におそるおそる手を伸ばす子どもの姿もあり、普段触れることのない動物に対する驚きや関心が生まれている様子がうかがえました。さらに、シカの手根骨を組み立てる「骨パズル」も人気を集めました。パーツの組み合わせ方を工夫しながら挑戦することで、展示を「見る」だけではなく「考え、理解する」体験へと広げ、実際に手を動かすことで関節のつながりを直感的に理解でき、教育的効果の高い活動になったと感じております。

24日（日）は2階講堂での「標本さわり」を引き続き実施するとともに、午後には3階講座室にて「手羽先の骨格標本を作ろう」を開催。参加人数は14名で、実際に手羽先を解剖・観察し、骨格標本として仕上げる過程を体験していただきました。骨を取り出し、形を整えて標本に仕上げる作業は、動物の体を支える骨の役割を理解する絶好の機会となりました。完成した標本はそのまま持ち帰っていただき、学びの記念品としても意義深い取り組みとなりました。

今回の「標本さわり」は、「触れる」「組み立てる」という体験を通じて、参加者が主体的に動物の体の仕組みに関心を持てる内容となりました。展示を一方的に鑑賞するだけではなく、来館者が実際に手を動かしながら学ぶことで、理解を深めることができました。また、毛皮や骨格の実物に触れる体験は、動物への興味関心を高めるだけでなく、命の重みや自然とのつながりを考える契機となったと考えております。

駿河ほねほね団といたしましては、今後もこのような実体験を重視した展示や講座を継続し、子どもから大人まで幅広い層に自然史への関心を広げてまいりたいと考えております。標本に触れ、骨を組み立て、さらに自ら標本を作るという一連の体験が、参加者にとって動物の体の不思議を探る第一歩となることを期待しております。